「風格の外交」

　２００２年の年頭、アフガン復興援助支援会議が東京でおこなわれていたころ、緒方貞子先生年賀のご挨拶に伺ったことがありました。

　緒方先生はわたくしのセンセイであり、国際政治と外交史を教わった。

　どんな授業だったかって？　それはたいへんでしたよ。緒方先生はクラスで一番できる学生を相手に講義と演習を進められるので、ほかの学生はついていくのに大変であった。すなわちそれはクラスの一番高いレベルを規準に、学生をぐんぐん引っ張っりあげていく授業ですから、底辺の生徒にあわせるようないまの文部科学省的な「ゆとりの教育」とは対極の教育であった。もっとも大学院の授業であるから、これはあたりまえか。

　緒方先生には『満州事変と日本の外交政策決定過程』という労作があるが、日本が太平洋戦争という、あのような無謀な戦争をなぜはじめたのかという関心と興味が、先生の学者としての原点であります。この本は、日米に散在するさまざまな資料と証言を多角的に分析した実証的なアプローチによる研究であるが、なんでこうなってしまったのだろうという問いを、具体的なデータをもとに実地に検証していく作業は、いま緒方外交の特徴といわれる「現場主義」ということの原点でもあろうか。

　また、わたくしたちは当時気鋭の学者として頭角をあらわしてきていたグレアム・アリソンの「Essence of Decision(決定の本質)」という論文を学んだ。アリソンの研究は３つのモデルからなっており、（１）のモデルはグローバルな国際環境、たとえばかつての冷戦構造が国家の外交方針を決定し、そのダイナミズムのなかで国家は動く、とマクロの見地からみる。（２）のモデルは、そのような国際環境において、アクターとしての国家の固有な行動パターンを抽出する。たとえば日本外交が常に対米追従外交でやってきた、などというのがそれです。そして（３）のモデルでは、国家の中の政策決定のメカニズム、すなわち政府、政党、官僚、民間という互いに利益の絡まるグループが入り乱れて外交政策が決まる、そういう政策決定者どうしのミクロなレベルのポリティックスを検証する。彼はこの３つのモデルを使ってキューバ危機におけるアメリカの対応について、マクロ的視点からミクロ的視点まで実証分析を行なったのでした（このモデルは以後、いろいろなケース・スタディにも使われ、たとえば米朝交渉担当大使、旧ユーゴ特命大使などを勤めたロバート・ガルーチ氏は学者でもあるが、彼はこのモデルを使ってアメリカのヴェトナム介入の過程を検討しています）。

　一口で云うならば、わたくしたちは緒方先生から現場検証を含む実証主義と、政治行動形態をマクロからミクロまで多面的に検証することの重要さを教わった。そのことは国際行政の実務をしている現在、わたくしの思考の基盤となっていることであります。

　その後わたくしはニューヨークへ行ったが、同じ時期に先生は公使として日本政府代表部に勤務された。ユニセフの歴代議長のなかで最高の議長だったと名を馳せた時期である。

　そして国連難民高等弁務官としてジュネーブにいらっしゃった１０年のあいだ、わたくしは国連欧州事務局にいたのですが、わたくしは「ミセス・オガタのセイト」ということでＨＣＲの官房に、木戸御免でけっこう大きい顔をして出入りしていた。いろいろな集まりにも引き回していただいて、緒方流政策決定過程の実際を見聞したのだが、いま振り返ってみると、かつての授業が「理論」の習得だったとすれば、ジュネーブでの見聞は「実際」の勉強であった。こういう恵まれた経験は、誰にでもできるものではない。わたくしにしてみれば、タダで「帝王学」を学んだようなものである。

　さて、アフガニスタン復興支援会議についてもいろいろお聞きしたが、さしさわりのない範囲で、２，３書いておきます。

　今回の会議では、なにが一番たいへんだったですかとお尋ねすると、それがね、今回の準備は、ほかの会議に較べてずいぶんスムースにうまくいったのですよ、ということであった。先生によれば、それは補佐官がみなさん優れた方々だったから、ということである。

　たしかに今回、政府・外務省が、緒方代表に補佐官として貼り付けたニューヨーク国連代表部のY公使や東京のS審議官などは、外務省きってのエースであります。わたくしはたまたまご両人を個人的に知っていて（公使はゼミの仲間、審議官はジュネーブ以来のお付き合いで、ポーカーの相手でもあった）、日頃から彼らの力量を尊敬しているのですが、緒方先生がいい仕事をしたとおっしゃる時は本当にいい仕事だったのだから、そのことを聞くことは嬉しいことでありました。

　また、緒方先生のアフガニスタンでの現地視察をとりしきったＨＣＲのフィリッポ・グランディ氏も、先生とのおつきあいは長く、アフリカのグレート・レークの問題を扱って、そのあと官房長をしたのじゃあなかったかな。先生の信任の厚いＨＣＲの幹部職員であります。

　ハンフリー・ボガートは『カサブランカ』の成功について聞かれたとき、それは脇役に名優が揃っていたからだと話したことがあります。「この映画を作ったとき、ワーナーのやつはオレひとりだと客がつかないと考えて、まわりを腕利きの俳優で固めたんだ。」たしかに『カサブランカ』はピーター・ローレ、シドニー・グリーンベルト、クロード・レインズなど、当時としてはキラ星のようなキャスティングであった。

「だから俺は、勝手にひとりで動き回っていればよかったんだ。」

　国際会議も、映画つくりとおなじように、事前の意見の調整とか、非公式の折衝とか、物理的なロジスティックスもあって、だから補佐にこのようなスタメンが集まっていれば、緒方共同議長も会議の運営を心配することは、これっぽっちもなかったろう。その意味で、今回の会議は外交のドリーム・チームが仕切ったようなものである。

　だが、『カサブランカ』がボギーの映画であるように、アフガン復興支援会議の主役はやはり緒方先生であったな。船橋洋一さんは朝日のコラムで、緒方効果ということを云っていたが、云いえて妙である。「緒方さんのマグネティックな力のおかげでこれだけの人々が集まった」という外務次官のコメントも書かれていたが、たしかにそれは千両役者の発する磁力みたいなもので、多くの出席者がマダム・オガタと自分との関係を紹介してから、発言していました。

　主役、脇役が揃ったドリーム・チームがきちんと機能したことは、ひるがえってみると、緒方先生のオーラによるところも大であろうと思う。たとえば先生が難民高等弁務官に赴任された初期の頃のＨＣＲの官房には、ＨＣＲのベストといえる人材が揃っていました。オーラがべつのオーラを引き付けるということはあるのです。

　というわけで、会議は、踊ることなく進んだわけだが、それでも参加した国々、ＥＵのような地域機関、世銀、国連などの国際機関などはそれぞれに自分たちのアジェンダ、思わくをもってやってきていました。それゆえ、当然、復興後のアフガニスタンについての考えについても、意見の違いがあった。ま、それはあたりまえのことで、だから議論がされるのであるが、会議の招聘から当日までに日数が足りなかったのか、たたき台となった国際機関のビジョンが物足りないものだったと、その点について、緒方先生はご不満であった。

　そのようにまだまだ議論・検討されるべきことは山ほどあるが、復興後のアフガニスタンは、どのような国になるのだろうか。先に述べたグレアム・アリソンのモデルをヒントに、これからのアフガニスタンを、国際政治のマクロ的視点と国内のミクロ的視点からみてみようか。

　皮肉なことではあるが、アフガニスタンは９１１によって国際環境が変化し、それによって援助を受けて浮上する機会をつかんだ、いわば“幸運”な国であります。国際社会はけっこう残酷かつ冷淡で、利益がないところへ援助の手を差し伸べることはない。あっても少ない。不遇を囲う国は、ソマリアとかルアンダとかほかにも多くあるのであって、だからコフィ・アナン国連事務総長が、ほかのアフリカの国々を忘れてはいけないとクギをさしたのは、その意味である。今回を契機に、国際社会（すなわちわれわれである）はアナン氏のコメントに心を致すべきであります。

　また、アフガンが再建にむけて進むことで、近隣の諸国にはどのような影響がでてくるだろうか。たとえばアメリカが今後も中央アジアに駐留を続けるなら、地政学的にも政治地図の色彩が変わってこようか。

　ミクロ的に国内を見ても、アフガニスタンはこれからどんな国になるのかまだ見当がつかない。支援の主要分野とされる中央行政、教育、保険・衛生、通貨の安定などのそれぞれが完璧にメチャメチャである。国内の対立もくすぶったままである。

したがってアフガニスタンが将来、国際社会でどのようなアクターになるか、誰にも見当がついていない。その意味でも、東京会議に参加した国々の思わくが錯綜するのである。

　兎にも角にも、いまの瓦礫が片付けられ、社会のインフラが形をなすのは、どんなに早くても十数年先のことでしょう。だが援助支援によるアフガン再建の機会は、おそらく今回が最初で最後である。だから、これからの戦略を誤ると、５０億ドルが流れ星のごとく消えてしまうこともあり得るのです。われわれは再建活動が軌道をはずさないよう、明確な青写真と技術を手に、じっくりと時をかけて国づくりを手伝っていかなくてはいけません。

　最後に、メディアによる追っかけについてであるが、まあこれは日本独特のものともいえず、欧州のタブロイドもやることは似たりよったりである。だが「緒方貞子特集」みたいな追っかけ記事はいずれも間接取材であることを、読者は知っておいた方がいいです。緒方先生は、無内容なタブロイド・レベルの取材は本能的に嗅ぎ取り、うまく逃げ切ってしまう。“脱兎のごとく”という言葉があるが、ハイエナのようなメディアから逃げるのは、本当にお早い。ここでいうタブロイド・レベルの報道とは、田中真紀子外相との確執（これもメディアのつくったものだ）とか、ＮＧＯ参加をめぐるウソ・ホントのあれこれをも含むことはいうまでもありません。

　であるが反対に、わたくしたち国際機関に働く者に対しては、「仕事の内容をもっと日本に向けて発信すべきだ」とおっしゃっています。国際機関の邦人職員の中には、わたしたちはコスモポリタンだからと、妙に斜に構えてソッポを向く人がいるが、そうではなく、あなたたちは国際人である前に日本人ということを忘れてはいけないということです。ＪＭＭでもおなじみになったカブールの山本芳幸さんの本など、その意味で望ましいともおっしゃっていました。機会を捉えて本を書いたり、話したり、そういう啓蒙的な活動を、もっともっとしなさいというご意見であった。

　船橋流に緒方先生を千両役者に喩えると、誰にあたるだろうか。歌右衛門、というと残り花になるからちょっとまずいが、じゃあ十三代目の任左衛門あたりはどうだろう。

　任左衛門は老いを知らない役者で、８０歳を過ぎてもなお現役だったし、「忠臣蔵」の由良助とか「菅原伝授手習鑑」の管承相とかは、任左衛門が７０歳を過ぎてから演じられたものだが、歳を経てますます冴える風格というものがあったと云われます。円熟した緒方外交の喩えとして、任左衛門の風格がぴったりのような気がします。

　いうまでもないことだが、しかし慌てて付け加えるなら、わたくしはお歳のことをいっているわけではない。おなじく大学院での恩師であった鵜飼信成先生は、人文学や社会学は自然科学と違って人間を扱う学問だから、学者の年輪と経験がモノをいうのだと云われたことがあるが、緒方外交は、ますますその熟柿の色あいが鮮やかになってきているということを云おうとしているのであります、わたくしは。

　ところで同じ時期、わたくしもじぶんのオフィスのために４０万ドルほどの資金援助を仰ぐため、官庁を走り回っていたのですが（わたくしは国際機関が恒常的な金欠病に病んでいる昨今、幹部職員の仕事は資金調達であるとまで思っております。加盟国から与えられた予算だけでまともな仕事ができるわけはない）、緒方先生は２日間六方を踏んで４５億余ドルである。わたくしの集金力は、緒方先生の１万分の１というわけですか。すなわちわたくしは「風格の外交」からまだ１万歩も離れた処にいるわけだ。歩めども、道なお遠し。